

大径木伐倒の教育的活用

鹿児島大学農学部附属高隈演習林

本演習林では、2007年より地元小学校の総合的な学習の時間で林業体験を実施しています。今年は新しいメニューとして「大径木の伐倒見学」を取り入れました。なぜ大径木の伐倒を見せるのか？当演習林では高性能林業機械による作業が主流ですが、108年前の開山当時に植林されたものは樹齢100年を超える大径木となり、プロセッサでは処理できず、チェーンソーによる伐木造材を行っています。大径木は伐倒木を大人数で処理（枝払い・玉切り）できるため、現場での連携プレーの大切さも伝えられます。林業を将来の職業の一つとして捉えて欲しい、カッコいい仕事として感じて欲しいという職員たちの思いも根底にありました。

林業体験1日のメニューは苗畑見学、植林、15年生スギのノコギリでの間伐と人力での搬出作業、プロセッサによる造材作業の見学、そして最後に大径木伐倒の見学という流れです。大径木は樹齢101年。根元にある、酒・米・塩を見つけた児童が質問しました。「どうしてお酒やお米があるの?」「古い木には魂が宿っているからお祓いをします。昔からの習わしだよ。」

いよいよ大径木の伐倒。チェーンソーがうなりをあげ、追いつからず慎重に楔を打ち込んでいくと、少しずつ傾いていきながら「バキバキバキ〜・・・、ドーーーーーン!!!」と大きな地響きを轟かせて、無事に、見事に狙った方向へ倒れてくれました。そして大径木が倒れた瞬間、短距離走の号令になったかのように、児童たちが一斉に駆け出しました。伐倒中はどうしても遠方からしか見学することができないので、その我慢が爆発したようです。技術職員はメジャーを持って樹高と直径を計測。101年分の年輪を必死に数える児童、受け口の争奪戦が始まったり、根本から梢端までを走って確かめに行ったり、樹木の上に腰掛けたり、児童たちは大きな興奮に包まれながら、それぞれに伐倒木に触れていました。

最後のふりかえりの時間、将来林業をやってみたい人いますか?という問いかけに、10人ほどが手を挙げてくれました。自分たちが今日植えた木は、自分たちが伐ることはできないかもしれません。でも自分たちが伐った木は昔の人が植えて育ててくれたもの。そんなふうに過去と未来がつながるのが林業。長いスパンのこの仕事を担ってくれる人が、この体験の中から1人でも生まれてくれたら嬉しいです。

